

大豆と小麦と塩水が
お醤油になるまで

No. 8

お醤油を仕込んで 10 ケ月の報告です。春ですね。暖かくなってきたとは言え油断の出来ない花冷えも来たりして、お風邪など召されていませんか？

お醤油くんもゆっくりと、のんびりとお昼寝でもしているようで、あまりかまってもらえないと言う感じです。けれど 1 ヶ月前よりは少しばかりとろみがついた気がしますね。

混ぜる時に、「君、少し重たくなったね」と少し意地悪言ってみたりもするのですが、やはり、昼寝をするんだそうでかまってもらえませぬ。あんなに戦ったフヨフヨくんですが今や懐かしい、遠い日の出来事…（感無量。でももうひと夏越さなくちゃ。）

さてさて。スーパーに足を踏み入れたとたん苺の香りにうっとり。露地物が出てくるとイカナゴも炊き終わって一段落。主婦はほっと息をつくというのが瀬戸内の春です。

忙しい春が一段落ついたら、どうしても思い出してしまう苺のババロア。

イカナゴを炊くお醤油の匂いが近所から消えた頃、家に帰ると苺の甘酸っぱい良い匂いがするのです！なんとも嬉しいその香りに「何してるの～」と駆け込むと、リングのケーキ型で作った苺のババロアのケーキがテーブルの上に鎮座しているではないですか！

しかし、生憎家族に 4 月生まれの者はいないし、誕生日でもないのにケーキ(状になっている)。しかもご丁寧に生クリームでデコレーションしてあるという異常事態。

「おかしい…」(子供の頃、誕生日とクリスマスにしかケーキは食べられないものだと、納得していましたから。)結局一人では解決できずそのまま首を傾げつつ部屋へ。

台所奥の 6 畳間では、妹が私の顔を見てやっぱり首を傾げています。

「見た？」「見た見た！なんで？」「何でやろ」と小声でひそひそ。

今思えば、子供らしく「わーい！ケーキだ！どうしたの？」と可愛く喜べばよかったです。そうしたら母も「苺がおいしそうだったから、作ってあげたよ！特別よ」と絵にかいたような母をすることができたのです。

なのに、娘達は混乱のあまりとってもかわいくない状態に。しかし、娘達の方でも、ショート寸前で自力では收拾がつかず、益々混乱するはめに。

「聞きに行く？」「一緒に行こう…」二人肩をつつき合うようにして台所へ。

「おかーさん…これケーキ、だよね？」(今思えばこの聞き方もまずかった)

「そうよ！」(見て判らんか！という挑戦的な母の目。何度も言うが母は料理上手である。)

「そ、そっか～。誰かの誕生日じゃないの？」

「誕生日よ！」と母。

「え？」と私。「誰？」と妹。

「お釈迦様」と母。(花祭り?)

「え~~~~~！！！」

誕生日とクリスマスにしかケーキは作らない、という家の方針を自ら曲げるわけにも行かず、こ

んな苦しいことに…。余裕で私たちをあしらっていると思っていた母が、一生懸命子育てをしてくれていたんだなあ、と今になってはほほえましく思えたりする春です。

少し重たくなった(まだ言ってる)、お醤油くんは元気にされていますか？

(チャイム 2005 年 4 月号掲載)

